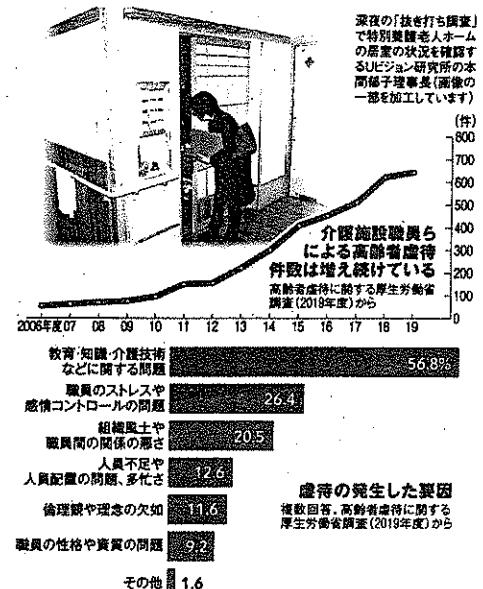


12/  
25

介護と  
わたしたち 2025年への課題④



#### 近年明らかになった施設職員による高齢者虐待の問題

殴る殴るなど一晩40回以上?

2020年10月、認知症の男性入居者に対する暴行容疑で夜勤専門職員(退職)が逮捕された。11月に市が緊急にまとめた報告書によれば、9月のある晩、この男性を踏みつけたり、殴ったり殴りつたりする行為を始めた。11月14日午後、ナースの映像で確認された。

改善指導由に頭痛と特別養護老人ホームの問題

同じ法人の特養ホーム3施設で13~18年にかけて、合計16虐待が判明。内容は、頭をたたくなどの身体的虐待や暴言スコールに対応しない介護放棄。県が改善指導中だった1月、介護職員が1人医者をたたか虐待が発覚。今後は

管理學仁者愛德爾瑞德·錢皮  
二十一世紀傳奇

「チューしたろうか」と利用者に首うなど当時の管理者(退職)による性的虐待が発覚、18年2月に市が虐待認定。その数カ月後、同じ職員の利用者への高圧的な発言が再び明らかに。1年間の新規利用者受け入れ停止などの行政処分(19年4月)。

④ 1施設で58人の虐待=特別養護老人ホーム(新潟市)  
定員約100人の特養ホームで58人の利用者に対する虐待  
覚(18歳未満)。認定されたのは、ナースコールを外すなどの介  
葉、ベッドを横で囲う身体拘束(身体的虐待)

## 介護職の虐待 「密室化」に懸念

**22** 人が繰り返し  
1年以上の期間  
「職員全員が『自分を利用したい』施設  
を目指します」。そんな運営方針を掲げて  
いた鷲山の特別養護老人ホームが11月、  
施設者虐待で新規入所1年停止の行政処分  
令から受けた。

相撲本部が行なった、「高齢者虐待認定」による高齢者虐待（19年度）は634件（前年度621件）で、高齢者虐待防止法が施行された86年度から13年連続で増えた。このうち過去にもの虐待があった事例が32件、虐待以外も含めて指導などを受けていた事例が約3割（190件）あった。

## 届かぬ家族の手

もとより、入居者は人が「ボンのもの」ではない  
わざわざいる。賃貸人が「ボンのもの」ではない  
として、ボーナス手入れされない。そのう  
ちで、ボーナス手入れしないを説いていた年金の老  
人を対象する賃貸人が「ボンのもの」ではない。  
必要は絶対ある賃貸の回数をだしておき。それ  
のほか、入居者の個性や、食事や通勤で  
かかる料金、部屋が使われないためにかかる  
ことの費用が算出された。

賃貸した賃貸のあと、期間の長さが、運  
営の理由ではない。ホームを運営する  
社会福祉法人理事長は「人材不足の影響で  
増え、賃貸の指導管理や教育体制に問題が  
あつた」と、運営を改善しており、出直しで再  
び始めた。一括借り。

高知県では2011年4月、町立の特別  
養護老人ホームで、入居者が「人が防水シート  
を体に巻き付けるれる虐待を受けた」と  
した証明のなど、オムツをこじりて手が汚  
れたなどの理由だった。町による  
ところが同じく虐待行為を行った感覚  
を含めない限りは、虐待は「やむを得た」  
行為へとみなす町職員。しかし、この  
の特徴は、虐待行為を指揮する町の担当職  
員の問題の中である。だが、虐待行為は  
到底受け入れられない。担当職員は気がねま  
せんでいたといふ。町は「一部に問題と思

年々増える介護需要の虐待。「園がおのれを保護するのか、施設運営の本質的な対策が見えてこない」。市町回避の施設を運営する施設の改善に取り組んできた公益社団法人虐待による精神障害者の本問題として虐待を認めた。西田義治は、「夜間「抜き打ち調査」なしの監視に加えて、独自の施設監査制度の確立も図ることで、現状を踏まえ監査を強化する。「抜け出た調査」を実行してから、こうした問題が少ないと監査結果が示す。そこで、「いつでもどこで何が何が起こるか」と警衛を受ける施設が今もあるのか」と警衛を受けた施設もある。事情で2年前に訪問した施設などでは、「車いすに乗った入室者の女性が、上では、車いすに乗った入室者の女性が、それをねじてこじて、廊下のカーテンを引いておらず、入居者の体をやがて抱き抱きながら乳首への状態だった。本題ではないが、的虐待ではないか」とすぐに指摘した。人生10~20年時代、高齢者痴呆の治療に本間さんは経験を語ります。「隠された病状を隠さず、」

## 重い心身の負担

底堅く明るく市で夜勤専門の職員が暮る仕事で通された廢帝事例について、市の緊急会議を開いた。市長は「今年1月、調査、検証報告書を公表しました。報告書は、医師院跡の人の資質評議、過度な勤務を続ける人の心身が障害し、感情の抑制されるばかりならじきなどを指摘。虐待は、個人の資質や施設の本質だけに原因があるものではなく、この間の施設の運営についても共通する課題が多いため」と発言を認めた。

東京府内でも各所のスケープホームを運営する林田俊哉さんは、「自らのホームで発生した虐待事案を詳細に振り返り、防止策を考える本を書いてこじて「『暮るのがねどに暮る暴力』(Hannonsora)」。

林田さんは、「暮るがねどに暮る暴力は組織化を基盤としているが、なぜかは理解不能だ。なぜかは組織の介護スタッフを何人も雇用しているが、2~3カ月で辞めてしまふ人が多い。長期的な教育指導が難しいのが実情」。ホームの夜勤は15時間勤務で、夜8時から翌朝6時まで、通常の高齢者より1歳近くして一人の体制だ。心身の高齢者は決して暮るくなれない。虐待してしまった職員は精神的に過ち込まれていくのは、人間属性の致した人手不足、待遇の問題など、おまけには原因が複雑にからみあつてしまい、と指摘する。

「自身の経済的な問題で悩んでいたときに、高齢者のケアがいいんだよね。若い人にいきなりする。なのに周囲で理解できることがない。しかし状況が極めて難くなると、林田さんは嘆く。「せめて金を大切にしない」と制御的だが、夜勤時にもうまくこなす。スタッフ配置が行き届く職員の待遇改善につながるため講習会の大講演が受け入れが不可で、林田さんは嘆く。「せめて金を大切にしない」とベルへの資金回収が上手ではある。「それだけ販売して金儲をしてしまう金があがらない業界に、よし人材は来ない」

一編集委員・清川卓哉